



北方民族博物館だより

No.138



HA184 皮製手袋 エスキモー／グリーンランド 20.2 x 13.6 cm 1990年収蔵

左の手袋をよく見ると、片手に2つ親指を入れる所が付いていることがわかる。無論、製作ミスではない。これは表裏両面に親指がある少し変わった手袋である。グリーンランドではカヤックを使用した狩猟を行うことがあるが、パドルを握っていると、掌の部分が濡れてくる。そこで、右手につけていた手袋の甲を左掌に、反対に左手につけていた手袋の甲を右掌になるようにつけ替えると、再び乾いた面でパドルを握ることができるという寸法である。

目次 Contents

- 1 表紙 皮製手袋
- 2 移動展・講座「カザフの工芸－伝統の意匠 現代の手仕事－」
／ロビー展・講座「北に魅せられた人2 画家木村捷司」
- 3 講座「グリーンランドの櫓を組み立ててみよう」
／第40回特別展「雪原を駆ける 北方民族・冬の移動手段」
- 4 特別展関連講演会「北方地域の犬ぞり文化」
／特別展解説講座「雪原を駆ける－北方民族・冬の移動手段」
- 5 研修会「教員のための北方民族文化入門」
／講座「神楽入門」
- 6 INFORMATION



移動展・講座

カザフの工芸

ー伝統の意匠 現代の手仕事ー

2025.4.19(土)-6.1(日)

共催：斜里町立知床博物館

令和6年度の当館企画展「カザフの工芸ー伝統の意匠 現代の手仕事ー」の資料をベースに、斜里町立知床博物館で移動展を開催しました。カザフは、伝統的に中央アジアの草原地域で遊牧に携わってきた民族で、本展ではモンゴル国西部バヤン・ウルギー県のカザフの工芸を中心に紹介しました。また、カザフの人々にとって重要な家畜であり、斜里でも戦後の衣料不足解消のため飼育されたヒツジに関する資料を追加し、カザフと斜里町のつながりを観覧者が感じられるようにしました。

4月20日(日)には、当館の中田篤主任学芸員がギャラリートークを行いました。参加した方々には、カザフの人々が住む地域やそこで作られてきた伝統的な工芸品に加え、現代的なアートへの応用についても知っていただくことができました。

また、5月25日(日)にはカザフ刺繍の研究を行う廣田千恵子氏(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)を講師として、モンゴル国に暮らすカザフの歴史や刺繍を含めた装飾文化についての講座・ギャラリートーク「カザフの装飾文化と手仕事」を行いました。解説後に行われたカザフ刺繍の実演コーナーでは、廣田氏がテンポよく縫い進める様子を間近で見ることができました。その後、講座の参加者による刺繍体験が行われましたが、布を挟んで針に糸をかける作業がとくに難しかったようです。また同講座では、小清水町在住の和田彩氏による羊毛紡ぎの実演・体験も行われました。ペダルを踏み車輪を回す紡ぎ車や、独楽のように回して糸を紡ぐ紡錘での糸づくりはなかなか大変でしたが、参加した方々は羊毛の感触を楽しみながら糸を紡いでいました。

両講座の盛況ぶりから、刺繍や織物、糸づくりといった工芸に対して関心をもっている方々が多くいらっしゃることを実感しました。(学芸グループ 倉本優)



廣田千恵子氏による刺繍の実演

ロビー展・講座

北に魅せられた人2 画家木村捷司^{しょうじ}

2025.5.31(土)-6.22(日)

共催：木村捷司記念室

「北に魅せられた人」シリーズは、北方諸民族や北方地域に関わってきた人たちの業績を通して北の文化や地域を紹介するものです。第2回目の本展では、画家木村捷司(きむら・しょうじ)を取り上げました。

木村は函館出身で、北海道開拓記念館(現 北海道博物館)の大壁画を制作したことで知られています。彼は少年時代を樺太で過ごしました。北海道大学予科医類に入学するも美術の道をあきらめることができず中退、その後東京美術学校(現 東京藝術大学)に入学し、同校を卒業しました。卒業後は故郷の函館で教職に就いた時期もありましたが、職を辞し、やがて戦前の樺太を訪れるようになります。そこで、先住民をはじめとした樺太に住む人々や風景を題材とした絵画を数多く描きました。本展では、木村捷司記念室が所蔵する、大泊(コルサコフ)や樺太先住民が集住した「オタスの杜」で描かれた作品を展示しました。また、木村は樺太各地に滞在する中で様々な写真を撮影したり、民族資料を収集したりしました。その一部は、当館にも収蔵されています。これらの写真や民族資料も展示し、戦前の樺太の様子や先住民の文化を紹介しました。

戦後の時代になると、木村はさらに広く国内外へ赴き、風景画や肖像画を描くようになりました。そうした作品のなかから、本展では北大のポプラ並木やウトロ湾の風景、モロッコの都市・マラケシュの水売りを描いた作品を展示しました。

6月8日(日)には当館講堂にて講座「画家木村捷司の足跡」を開催しました。当館の笹倉いる美学芸主幹により、木村の半生や展示資料についての解説が行われました。

本ロビー展以降、当館の情報普及室には木村の画集が置かれ、今年中は自由に見られるようになっております。本展では展示されなかった北方に関連する絵画も収められていますので、ご来館の際はぜひ手に取ってみてください。

(学芸グループ 倉本優)



ロビー展の様子

講座

グリーンランドの^{そり}橇を組み立ててみよう

2025.7.12(土)

講師：日下 稜(当館学芸員)

第40回特別展「雪原を駆ける 北方民族・冬の移動手段」の関連事業として、グリーンランドの犬ぞり文化やそりの構造について紹介する講座を開催しました。講座では、参加者が2023年まで現地で使用されていたそりをロープで縛って組み立てる体験コーナーを設けました。

講座の前半では、グリーンランドでは現在でも冬の交通手段として犬ぞりが使用されていることを紹介し、その構造や乗り方、犬のつなぎ方や役割、アゴヒゲアザラシの革ひもを使ったムチの作り方、犬ぞりの交通ルール、犬ぞりを使って狩猟する獲物などについて解説しました。犬ぞりを使用する文化は、カナダやアラスカにもありますが、現在ではそのほとんどが、レースや観光用です。グリーンランドにおいても、都市化や産業構造の変化、気候変動などにより、そりイヌを飼う人は減少しており、犬ぞりからスノーモービルや四輪バギーなどの乗り物へ置き換わりつつありますが、全国各地で犬ぞりレースを行ったり、犬ぞりを学校教育に取り入れたりしながら独自の文化を守る取り組みが続けられています。

講座の後半では、本物のグリーンランドの犬ぞりを用いて、そりの組み立て作業と犬用のムチを振る体験をしてもらいました。そりの組み立てに際しては、木が割れるのを防ぐために木目をずらして穴を開ける工夫や、しっかりと縛ることができるロープワークについて学び、その後参加者全員で木材をそり本体に固定しました。参加は4名と少数でしたが、その分多く楽しんでいただけたのではないかと思います。参加者からはロープを使ったそりの固定方法について、「特別なロープワークが必要なのかと思ったら、すごく単純な縛り方で驚いた」との感想が聞かれました。本講座で組み立てたそりは特別展の期間中、特別展示室にて公開しています。(学芸グループ 日下稜)



犬ぞりを組み立てる参加者

第40回特別展

雪原を駆ける 北方民族・冬の移動手段

2025.7.19(土)-10.19(日)

現在開催中の特別展では、犬ぞりやトナカイそり、スキーやスノーシューを展示しています。これらの移動手段は冬の間、雪が積もったり、海や湖が凍結したりする地域に特徴的な移動手段です。

スキーやスノーシューは、地面（雪面）に接する面積を広げることで、雪に埋まりにくくより歩きやすいように発達してきました。地形や雪質、機能、その土地で取れる素材の違いによって、様々な形状のものがあります。ユーラシア大陸ではスキーが、北アメリカ大陸ではカンジキが使われることが多かったようです。同じスキーでも、長いもの、短いもの、左右の長さが違うもの、裏にアザラシやトナカイ、ウマなど動物の毛皮を貼ってあるものなど様々です。カンジキも北アメリカではテニスラケットのような網目状の大きなカンジキ（スノーシュー）が使われていましたが、日本ではよりシンプルなカンジキ（ワカン）が主流でした。展示では、地域ごと共通点や違いに注目して見ていただけるとより楽しむことができると思います。

犬ぞりやトナカイそりも、用途や積み荷の重さ、移動距離、使用される土地の積雪量などによって、様々な形状、大きさのものが作られました。本展示では、犬ぞりはグリーンランドのエスキモーやロシアのナーンイ、カナダの北方アサバスカのものを、トナカイそりはフィンランドのサミやロシアのコリヤーク、ウイグルの人たちが使用していたものをご覧になれます。

今回の特別展では、その他にも犬やトナカイとそりをつなぐハーネスや、そりを操る時に使用するムチ、そりの模型、犬ぞりやトナカイそりの様子を写した日本領時代の樺太の絵はがき、現代のスキーやカンジキ、スノーモービルなども展示しています。10月19日（日）まで開催していますので、ぜひご覧ください。

(学芸グループ 日下稜)



特別展の様子

特別展関連講演会

北方地域の犬ぞり文化

2025.7.19(土) 10:00-11:30

講師：北原 モコットウナシ氏

(北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授)

中田 篤(当館 主任学芸員)

特別展「雪原を駆ける 北方民族・冬の移動手段」の関連事業として、北方地域の犬ぞり文化を紹介する講演会を実施しました。

はじめに中田が「北方民族・冬の移動手段と犬ぞり」と題し、犬ぞりの分布や形式、具体的な利用方法を紹介しました。

犬ぞりは、そりを引くイヌ、引き綱、イヌを引き綱に結び付ける装具、複数のイヌの配置法、人や荷物を載せるそり本体など、いくつかの要素から構成されています。そして、そりの操縦やイヌの訓練など、犬ぞりの運用を支える技術も重要です。

また、犬ぞりを引かせるためには、そりイヌの餌を安定的に確保する必要があったこと、犬ぞりはそうした条件を満たす海獣狩猟やサケ・マス類の漁撈をおこなってきた地域で利用されてきたことなどを説明しました。

次に北原講師に登壇いただき、「樺太アイヌのヌソ(犬ぞり)と北方文化」というテーマで、樺太アイヌの犬ぞり文化について詳しく紹介していただきました。

まず、犬ぞり文化の南限が樺太で、犬ぞりは北方地域とのつながりを強く示す要素であることが指摘されました。そして、サハリン先住民のウイльтаやニブフのそりとの共通点、部品や装具の名称から、アイヌの犬ぞりはニブフなどから取り入れられたと推測されることが示されました。

次にイヌの装具やより戻し、御者の装備など、樺太アイヌの犬ぞりにかかわるいくつかの文化要素について、詳しく解説していただきました。犬ぞりの積載量やスピード、乗り心地についての具体的な説明もあり、参加者は興味深そうに耳を傾けていました。(学芸グループ 中田篤)



北原講師の講演

特別展解説講座

雪原を駆ける

ー北方民族・冬の移動手段

2025.8.16(土) 10:00-11:30

講師：中田 篤(当館 主任学芸員)

特別展の展示内容をより深く知っていただくため、解説講座を開催しました。

前半は、講堂で展示の概要を説明しました。最初に冬の移動手段としてスキーとかんじきを取り上げました。スキーは、ユーラシア大陸に分布し、滑走して移動する道具です。滑走面が平たいタイプと大きく湾曲しているタイプ、また滑走面に動物の毛皮を張り付けたタイプのスキーもみられます。一方、かんじきはおもに北アメリカ大陸に分布し、雪面を歩いて移動する道具です。北アメリカでは、木枠に革ひもを網状に張ったテニスのラケットのようなかんじきが生まれ、地域ごとに形や編み方が異なるさまざまなタイプに変化しました。

次に、飼いならした動物に引かせる「そり」について説明しました。海岸地域や大きな河川の流域では、犬ぞりが使われてきました。また、家畜トナカイが飼育されてきたユーラシア大陸には、トナカイそりが広がりました。

最後に、現在の冬の移動手段についてお話ししました。多くの地域では、犬ぞりやトナカイそりに代わってスノーモービルが普及しています。ただ、スキーやかんじきは冬のレジャーやスポーツに活用されていますし、一部では今も日常的に伝統的な雪上移動具が使われています。

後半は展示室に移動し、実物資料をご覧いただきながら、いくつかの資料について特に詳しく解説しました。スキーの裏側に張りつけられた毛皮のつやや質感、かんじきの枠の構造や複雑に編みこまれた革ひも、犬ぞりやトナカイそりの大きさや材質など、口頭での説明や写真では伝わりづらい実物の迫力を感じていただけたと思います。

(学芸グループ 中田篤)



解説の様子

研修会

教員のための北方民族文化入門

2025.8.1(金) 9:30-12:30

講師：深澤 美香氏（国立アイヌ民族博物館 研究員）
呉人 恵（当館館長）

8月1日、道立北方民族博物館活用学習のための指導者研修「教員のための北方民族文化入門」が催されました。本研修では、深澤美香氏（国立アイヌ民族博物館研究員）と呉人恵（当館館長）の二名が講師を務めました。

まず、呉人が「世界のことば」と題して、世界の言語を分布、数、分類、現状などの観点から概観したのち、世界で最も話者数が多くグローバル言語とも呼ばれる英語を例に、話者数が多いこととその言語自身の性格とは無関係であることを論じました。次に日本の言語・方言を分布、分類、現状などの観点から概観しました。さらに、当館が対象とする北方地域の諸言語を取り上げ、アルタイ諸語の新しい進出、生え抜きの古アジア諸語のアルタイ諸語への同化吸収、古アジア諸語と北米先住民諸言語の類似性などについて紹介しました。最後に、WALS（言語構造世界地図）から母音の多寡や語順タイプといった言語特徴の分布状況がわかることを紹介して、話を締めくくりました。

続いて、深澤氏には「はじめてのアイヌ語」と題してお話をいただきました。まず、地名や借用語などの興味深い例を挙げながらアイヌ語概説をおこなったのち、勤務先の国立アイヌ民族博物館とアイヌ語教室の活動についての紹介がありました。次に、定期的に催されているというアイヌ語体験コーナーを再現し、アイヌ語の名词や動詞、文の作り方などを、アイヌ語だけを使い、体を動かしながら覚えるというユニークな方法で指導してくださいました。さらに、大学で専攻された教育学の知見に基づき、アイヌ語教育と博物館学の連携の可能性についてのお考えも紹介いただきました。最後に、言語の多様性や異文化に対する理解を促進するために学校教育にアイヌ語学習を導入することのメリットが示されました。

特に、アイヌ語体験コーナーでは、参加者の皆さんには、体を動かしてアイヌ語を学ぶ楽しさを十分に味わっていただけたのではないかと思います。（館長 呉人恵）



「テレケ（跳ねる）」する参加者

講座

神楽入門

2025.8.2(土) 10:00-11:30

講師：橋本 裕之氏
（國學院大學学術資料センター 客員教授／坐摩神社 権禰宜）

國學院大學学術資料センター客員教授で、大阪市にある坐摩神社の権禰宜も務めておられる橋本裕之氏をお招きし、「神楽入門－豊郷神楽への道－」と題した講座を開催しました。当日は、網走市内に伝わる豊郷神楽の保存会の方々を含め、多くの方々に参加いただきました。

講座はまず、「神楽とは何か」という基本事項の解説から始まりました。神楽の起源やその精神的・社会的機能、民間の神楽の四分類など、初めて聞くお話が満載で大変興味深い内容でした。講師の橋本氏は自身も神楽の担い手として活動されてきた経歴の持ち主であり、当事者ならではのエピソードなど、貴重なお話を伺うことができました。本講座では、日本全国の様々な神楽の映像を見ることができたほか、神楽をモチーフにした多くのアニメ作品も事例として紹介され、初心者にもわかりやすく、視覚的・聴覚的に神楽の奥深さに触れることができました。

神楽に関する概説的な説明のあと、とくに終盤では、網走に伝わる豊郷神楽に関する橋本氏の見解が示されました。前日に豊郷神楽を実際にご覧になった橋本氏は、宮城県南部から伝わった豊郷神楽がいかにハイブリッドな演目構成であるかを指摘し、それがおそらく網走伝来前にすでにそのようなかたちであったこと、さらに網走周辺にはほかに継承されている神楽がないため、結果的に神楽同士が接触・変容することなく、一世紀以上前の伝来当初の姿に近い神楽の様式を現在に伝えている可能性があることについて言及されました。これらの点から、今後、豊郷神楽は北海道指定の無形民俗文化財になってもおかしくないとのことでした。講座の締めくくりとして、橋本氏は「豊郷神楽の最も素晴らしいところは、何よりたくさんの若い世代の担い手がおり、地域の人々によって今も大切にされていることだ」ということを強調しておられましたが、この点については聴講していた一同大変納得させられました。

（学芸グループ 佐藤重吾）



全国各地の神楽が紹介されました

第39回北方民族文化シンポジウム網走

『映像と北方諸民族文化 2』 ご案内

写真や映画など視覚表現を人類学的に研究する映像人類学では、北方民族文化を対象とした数多くの成果が上げられてきました。本シンポジウムでは、昨年に続き、北方地域の事例を中心に民族文化を対象とした映像について検討します。

会期：令和7年（2025年）10月11日（土）・12日（日）

各日9:00～16:00（対面・オンライン方式の併用）

会場：オホーツク・文化交流センター（エコーセンター 2000）

大会議室[網走市北2条西3丁目/TEL.0152-43-3704]

内容：国内外の専門家・研究者による研究発表（同時通訳付き）

発表者：リーボ ニグラス（タルトゥ大学/民族学研究員〔エストニア〕）、ピクトリア ピーモット（ヘルシンキ大学/コネ財団先住民研究員〔フィンランド〕）、東北大学東北アジア研究センター/連携研究員、大石 侑香（神戸大学大学院国際文化研究科/准教授）、川瀬 慈（国立民族学博物館/教授）、金 大偉（映像作家）、城野 誠治（東京文化財研究所/専門職員）、田口 洋美（狩猟文化研究所/代表）、大傍 正規（国立映画アーカイブ/主任研究員）、笹倉 いる美（北海道立北方民族博物館/学芸主幹）

運営委員：田口 洋美（狩猟文化研究所/代表）、呉人 恵（北海道立北方民族博物館/館長）、中田 篤（北海道立北方民族博物館/主任学芸員） 参加無料

**道民カレッジ連携講座（予定）

主催：一般財団法人北方文化振興協会・北海道立北方民族博物館

後援：網走市、網走市教育委員会、北海道民族学会、北海道考古学会、北海道博物館協会

ほかのイベントのご案内

講座「絵と詩 少数民族ショルのところを覗いてみよう」

日時：11月1日（土）10:00～11:30

講師：アクマタリエワ ジャクシルク氏（東京大学附属図書館 U-PARL/中央ユーラシア担当特任研究員）

上映会「北方民族博物館シアター冬」

日時：11月22日（土）10:00～11:30

講師：日下 稔（当館学芸員）

講座「皮革文化財と科学技術」

日時：12月7日（日）10:00～11:30

講師：飯岡 稚佳子氏（東京藝術大学大学美術館/学芸研究員）
岡嶋 克典氏（横浜国立大学/教授）
田口 智子氏（東京藝術大学/特任准教授）

INFORMATION

行事報告

講座・研修など

◆8月6日（水）、「高校生のためのオープン・ミュージアム」が行われました。当館学芸員による博物館の仕事紹介やバックヤードツアー、缶バッジづくりなど、非常に盛りだくさんの内容となりました。参加した3名の高校生のみなさんからも好評をいただきました。



バックヤードツアーの様子

イベント

◆6月22日（日）、第11回ユハンヌス夏祭りが開催されました。当日は天候不良のため野外でのモルック大会は中止されましたが、恒例のフラダンスのステージやフィンランド風スーパ「kesäkeitto」の配布は予定通り行われました。おかげさまで今年も盛況のうちに幕を閉じました。

はくぶつかんクラブ

◆6月14日（土）、はくぶつかんクラブ「フェルト動物とフェルトボールでつくるサンキャッチャー」（講師：石原生久代）を開催しました。



フェルトで動物をつくります

◆7月26日（土）、はくぶつかんクラブ「土器づくり」（講師：菅原章子）を開催しました。夏休み期間に入ったこともあり、キャンセル待ちになるほどの人気ぶりでした。



ユハンヌス：子供たちのフラダンス披露



土器づくり：出来の良さに笑みがこぼれます

お詫びと訂正

◆前号4ページのロビー展「北に魅せられた人々2 画家木村捷司」のルビに誤りがありました。謹んでお詫び申し上げます。

（誤）捷司^{じょうじ} → （正）捷司^{しょうじ}

北方民族博物館だより No.138

令和7年（2025年）9月22日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

<https://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会